

本読み会新聞



リーダーズ 《2018》

15周年に向けて

本日は、『本読み会』&『忘本会!』にご参加いただき、どうもありがとうございました。楽しんでいただけましたでしょうか?きっと楽しんでいただけたことと思います!

我々主宰の二人も、もうだいぶ長いこと本読みを続けてきていますが、不思議なことに、なかなか“飽きる”ということがありません。毎回違う作家、作品を取り上げているということもありますが、毎回違う顔ぶれで本読みをすることが、新鮮さを保ってくれているのではないのでしょうか。

実は『本読み会』の活動は、来年で15周年を迎えます。いつも応援してくださっている皆さまに、もっと『本読み会』

のことを知ってもらおうと、これまでの活動を年表としてまとめました。年表を見てみると、取り上げた作家の人数は56人、作品の数は89作品にもなるようですが、その一人一人、一つ一つの印象が今も鮮やかに浮かびます。毎回4時間をかけてじっくり取り組んだ甲斐があったというものです。

年表には一口コメントもつけておきました。お暇があれば、どうぞご笑読いただければと思います。また次の一年も、『本読み会』をよろしく願いいたします。

大野 遙

戯曲は劇場の夢を見る

先日、アーサー・ミラーの『セールスマンの死』を観に行ったときのこと。客席に大学時代の恩師を見つけました。これは珍しい。この先生、演劇の専門家なのにめったに劇場へ足を運ばないのです。先生は「演劇は戯曲だ。」が口癖でした。演劇は俳優でも、演出でも、上演でもなく、戯曲。劇場で上演を観ても不満ばかり募るので、そのうち劇場に行かなくなってしまうと授業でよく語っていました。私も演劇を勉強し始めでしたので、「そういうものなのか」と聞き入り、これは『本読み会』の活動にも大きく影響していると思います。

戯曲を読む者は、頭の中に自分の劇場を持っています。大・中・小とあらゆる劇場を所有し、美男美女、若手からベテランまであらゆる腕利きの俳優が揃い、無尽蔵の予算でどんな舞台美術、衣裳、照明、音響も思いのままです。もちろん実際の現場ではこうはいかない。決して実現することのない理想の舞台を思い描きながら、紙に書かれた台詞を架空の舞台にのせる営みが「本読み」なのかもしれません。戯曲を読むことは、夢を見ることに似ています。

先生は『セールスマンの死』の戯曲を読みながら夢を見たのです。これまで何度も、何十回も、おそらく目の前の上演よりも遥かに美しい夢を見てきたのでしょうか。ちょうど、叶わぬ夢を見続けるウイリー・ローマンのように。舞台と客席の間ではいくつもの夢がすれ違いながら乱反射し、いつか正夢になるときを待っています。

休憩中に声を掛けようと思ったのですが、先生は一幕が終わったところで帰ってしまい、ついぞご挨拶はかきませんでした。帰るほど酷い出来だとは思わなかったのですが・・・まあ、先生らしいといえば先生らしい。先生が途中で帰ってしまうことを含めて『セールスマンの死』は良い作品でした。劇を観るといえるのは、鑑賞ではなく体験ですから。

末筆になりますが、今年も『本読み会』の活動にご賛助いただきありがとうございました。来年もまた、皆様と戯曲を読むのを心待ちにしています。よいお年を。

松山 立

『本読み会』年表

大野の一口コメント

日時 (人数)	イベント名	作家	作品	作品紹介
2004年				
3/20～ 3/21	特別上演企画	エドワード・オールビー	『動物園物語』	男性2人芝居。舞台装置は公園のベンチのみ。1時間ほどの上演時間のうち半分は「ジェリーと犬の物語」と題される長い独白です。人とモノ、人とイヌ、人とヒト。孤独の宿命を背負う人間は、いかにして関係性＝愛を結ぶべきなのか。
〃	〃	ウィリアム・サラヤン	『おーい、救めてくれ』	田舎町の牢獄に囚えられた男が、世話役の少女をだまして何とか脱走しようと試みるというお話。しかしそこはサラヤン、たった30分の会話の中に、人間の生が光り輝く瞬間を切り取っています。まぎれも無い傑作。
?	お花見			
4/24 5/1 (13人)	第一回	J・P・サルトル	『汚れた手』	現実主義者の革命家エドレルの元に、暗殺者として送り込まれた若者ユゴー。そしてその美しき妻。果てなく続く政治談議の中に、苦悩する人間の姿が描かれる。言葉を聴くことが出来る者に、引き金は引けぬのだ。「言葉」の劇。
5/29 6/5 (24人)	第二回	A・P・チェーホフ	『かもめ』	若者の恋、熟年の倦怠、老年の悲哀。満たされない人々の果てしないずれ違い。人生の全てを四幕の中に詰め込んだ、近代演劇を代表する「喜劇」。
6/12 (12人)	特別企画『かもめ』ビデオ鑑賞会	A・P・チェーホフ	『かもめ』	蛭川幸雄演出『かもめ』のビデオ上映会。
7/10 (10人)	第三回	ニール・サイモン	『カリフォルニア・スイート』	カリフォルニアのホテルの一室を舞台に、4組の客の人生の一場面をオムニバス形式で描いた作品。たくさん笑ってちょっぴり泣いて。喜劇作品で名を知られるニール・サイモンの洗練されたウェルメイド・プレイ。
8/6 8/20 (8人)	第四回	テネシー・ウィリアムズ	『ガラスの動物園』	夫に先立たれた母、足の不自由な娘、そして惨めな人生を厭う息子。それぞれに苛立ち、軋む家族は、幻想の中へ逃避する。それはガラス細工のように脆弱なユートピア。ウィリアムズの自伝的名作。
9/19 (11人)	第五回	アーサー・ミラー	『代価』	暗黒の木曜日で破産した男の遺した家具を、処分しようと集まった者たちの話。『セールスマンの死』『るつぼ』で知られるミラーは、「お金」という現実的なものをとても丁寧に描く作家です。結局、現実こそドラマがあるのかもしれない。
9/26	特別上演企画	レナード・メルフィ	『フェリーボート』	男が女をナンパする、ただそれだけ。ただそれだけのはずなのに、思いもなかった自分がひょいと顔を出す。現代という時代の中で、人間と人間が出会う瞬間を探求した作品。
11/21 (7人)	第六回	ウィリアム・シェイクスピア	『ロミオとジュリエット』	いわずと知れたラブストーリーの究極形。禁断の恋は、家族を捨て、親族を殺し、国家を巻き込んで走り抜ける。『ウエストサイドストーリー』も『タイタニック』も、この戯曲がなければ生まれない。
2005年				
2/19 (13人)	第七回	井上ひさし	『藪原検校』	「東北の片田舎に生まれた盲の少年が、晴眼者に伍して生きて行こうとしたとき、彼の武器はなにか？—悪事以外にない！」検校の位にまで登りつめた悪人・杉の市の痛快一代記。演劇の魅力を存分に詰め込んだ、世界に誇る大傑作。
3/18～ 3/20	特別上演企画	井上ひさし	『藪原検校』	
5/7 (13人)	第八回	別役実	『マッチ売りの少女』	寒い夜。夫婦がお茶の支度をしているところへ現れる女。夫婦は女をお茶に誘う。しかし女は言う。「私はあなた方の娘です」。第13回岸田國土戯曲賞受賞作品。
6/25 (16人)	第九回	野田秀樹	『TABOO』	舞台は南北朝の動乱の世。天皇の子に生まれ、「バカ」として育てられた主人公・一休は、やがて芸事の道を極めていく。多彩な言葉遊びで、言葉が音であることを思い出させてくれる、豊かな戯曲。
8/23 (9人)	第十回	ソフォクレス	『オイディプス王』	テーバイを治めるオイディプス王。先王を殺した犯人を突き止め追放しようとする中、彼は自分自身の呪われた運命に直面する。アリストテレスがこの戯曲の中に理想を求めた「悲劇」の祖。
10/8 (20人)	特別企画講演会『松下裕氏、チェーホフを大いに語る』			講師：松下裕氏（翻訳家）
11/26 (8人)	第十一回	ジャン・ジロドゥ	『アンフィトリオン38』	ギリシャ古典劇に登場するアンフィトリオン。「これまでの演劇史の中で何度も何度も翻案されているから、きっとこれは38作目くらいだろう。」ジロドゥのユーモア溢れるタイトルです。人間くさい神々と、神々しい人間の対比。
11/27 (11人)	特別企画『ワークショップ』			講師：イクバル・カーン氏（英国の演出家、俳優）

当時明治大学に在籍していた主宰二人が、仲間たち数人と企画した上演企画。この上演企画の最中に『本読み会』の構想を練り始めました。「一人きりじゃ戯曲の勉強をサボっちゃうから、周りを巻き込んでやろう」それが会発足の動機です。

第一回目は言い出しっぱの大野の好きな戯曲をやるということ、この戯曲を選んだのですが、それが失敗でした（笑）。慣れない進行と延々と続く政治談議に居眠りする参加者まで出る始末。前途多難な船出でした。

当時はNHK衛星第二で舞台中継が定期的に放送されていました。扇田昭彦さんが解説で。この蛭川演出の『かもめ』は、その放送の録画です。何度も何度も見返したVHSは、上映会の際はそれはもうひどい画質になっていたものです。

日本では出版も少なく、あまり知られていない作家です。故・蛭川幸雄さんに、現代人劇場時代に使用した上演台本のコピーをいただいて、上演にこぎつけました。手書きの翻訳台本には石橋蓮司さんらの名前も。当時の熱気が伝わってきました。

実家の父親の本棚の中から盗み出したのが井上戯曲との出会いでした。この作品はとにかく面白くて、井上戯曲の中では最もお気に入りです。

大野が演出となり、大学の仲間たちと上演しました。知識も技術もお金もない上演でしたが、熱意だけがありました。ちなみに松山は参加していません。

『本読み会』が扱った一番新しい戯曲です。来年度は松田正隆など読む予定。久々の更新です。

とあるご縁で、チェーホフの翻訳で知られる松下裕さんに講演をしていただきました。この講演で、チェーホフが実はイケメンだということに気づきました。

このワークショップは本当に面白かった！イギリスの演出家は稽古で何かを伝えようと思った時に、ものすごい数の引き出しを持っているんだな、と感心しました。この日身体で感じた『桜の園』ロバート・ヒンの興奮は、今もまだ忘れられません。

12/17 (18人)	『忘本会！2005』			
2006年				
1/14 (18人)	特別企画『スタン エフスキ講演会』 聴講会			主催：ポーランド大使館
1/21 (11人)	第十二回	ウィリア ム・シェイ クスピア	『十二夜』	嵐で引き裂かれた双子の兄妹。男装して恋する男性に対する女。勘違い。すれ違い。複雑に絡み合うプロットが、シェイクスピア の傑作喜劇を作り出した。
1/23 (12人)	特別企画『ワーク ショップ2』			講師：イクバル・カーン氏（英国の演出家、俳優）
4/22 (14人)	第十三回	岸田國士	『ぶらんこ』 『沢氏の二人 娘』	さりげない日常の会話なのに、この時間はこの人物にとって一生 忘れられない時間になるのだろう、そう感じさせる何かが、日本の 劇作の父・岸田國士の書く戯曲には込められています。それぞれ 短編、中編の名作。
5/28 (12人)	特別企画『演技 部：自分の身体を 知る』			
8/19 (14人)	第十四回	加藤道夫	『なよたけ』	世にも美しいなよたけを腕に抱くために、物語を完成させる石ノ 上ノ文磨呂という青年。これは『竹取物語』が生まれるまでの物 語。戯曲を流れる美しい日本語が、加藤道夫の静謐な筆を映し出 す。
9/24 (5人)	特別企画『演技 部：丹田』			
10/8 (8人)	第十五回	安部公房	『愛の眼鏡は 色ガラス』	精神病院を舞台に、正気と狂気、条理と不条理の境を問いかける 野心作。寺山修司が演劇の外から現実を破壊しようとしたなら ば、彼は演劇の内ですれをやろうとしたのかも知れません。グラ グラしたい人は、是非。
10/22 (3人)	特別企画『演技 部：アクション ング』			
11/19 (7人)	第十六回	三島由紀夫	『弱法師』	家庭裁判所の一室。盲目の俊徳の親権をめぐる両家対立す る。傲慢で冷徹な俊徳は、調停委員の級子を前に、「この世の終 わりの景色」を語りだす。「僕ってね・・・、どうしてだか、 誰からも愛されるんだよ」
12/9 (13人)	『忘本会！2006』			
2007年				
1/28 (8人)	第十七回	ウィリア ム・シェイ クスピア	『テンベス ト』	嵐に襲われ絶海の孤島に漂着したナポリ王の一行。実はその嵐は 孤島の主プロスペローの魔法によるものだった。妖精のいたずら に若者の恋。円熟のシェイクスピアが書き上げたロマンス劇の傑 作。
4/14 (13人)	第十八回	木下順二	『オットーと 呼ばれる日本 人』	20世紀最大のスパイ事件「ゾルゲ事件」を劇化。生か死か、家族 か世界か、個人か国家か。多重に交錯する二律背反の中に、木下 順二が戦後日本を描き出す。
5/27 (8人)	第十九回	ヘンリッ ク・イブセ ン	『ヘッダ・ガ ープレル』	気位高く、傲慢で、純粋。情熱的で、臆病な、美貌の女ヘッダ。 矛盾を体現するような彼女の魅力は、世界中の女優を今なお魅了 し続ける。性差や時代と言ったテーマを超え、神にはなり得ない 人間の業を描いた近代戯曲の金字塔。
7/7 (9人)	第二十回	寺山修司	『犬神』	「犬から生まれた子」と村で噂される月雄。老婆と二人っきりで 暮らす月雄のもとへ、迷い込んで来る老犬。異常な愛情を注ぐ月 雄。彼に流れる「犬の血」が、村と家族に奇妙な悲劇を呼び込 む。寺山修司初期の傑作。
9/1～9/5 (10人)	特別企画『ワーク ショップ：メゾ ードによる俳優の心 身のメンテナンス』			講師：平井愛子氏（京都造形芸術大学准教授・演技トレーナー）
9/23 (9人)	第二十一回	モリエール	『ドン・ジュ アン』	「おれが信じるのは、な、二に二を足せば四になる、四に四を足 せば八になる、これさ」徹底した無神論者で、女を口説き落とす ことしか頭にない快楽主義者ドン・ジュアン。欲望と快楽を追求 する彼の中に、人類の業が垣間見える。モリエールの傑作喜劇。
12/1 (9人)	第二十二回	サマセッ ト・モーム	『ひとめぐ り』	青年とその妻。青年は何十年ぶりに母親に会う。母はかつて青 年を捨てて『駆け落ちした過去を持つ。世代をひとめぐりして、 若夫婦は同じ過ちをくり返す。ロンドン演劇界を席巻したモーム のウェル・メイド・プレイ。
12/1 (12人)	『忘本会！2007』			

どこからか情報を仕入れてきて、仲間たちと聴きに行きました。大使館なんて入ったのは後にも先にもこの時だけです。中身は全く覚えていません（笑）。

前回のワークショップがあまりに面白かったので、リクエストしてもう一度開催しました。参加者は事前にセリフを入れてきて、チェーホフ『かもめ』の4幕、カードゲームのシーンを作りました。イッキー曰く、「チェーホフはうるさい芝居なんだ」。納得。

初の試みとして、全体を二班に分けて、それぞれ別の作品を読みました。また、ここからしばらく「日本作家シリーズ」として、日本人作家を続けて読んでいます。進行の仕方など、試行錯誤していた時期でした。

私の大好きな作家です。

この頃何度か開催されている『演技部』というのは、読むだけでなく動こう、という俳優ワークショップ企画です。この後何回か開催しました。いろいろやっていましたね・・・。

みなさまで存知の「お正月だよ！シェイクスピア祭り」です。ほとんど毎年、年始はシェイクスピアを読みます。たまに違うこともやっています。

この頃は、イブセンは嫌いな作家でした。10年後の『本読み会』で、イブセンは愛する作家になりました。

大学生の頃、寺山修司は大好きでよく読んでいました。青森の寺山修司記念館、行きたい行きたいと思いながら、まだ行っていません。

こちらもとあるご縁で実現したワークショップ。本場仕込みのメゾード演技。楽しい時間を過ごしました。

2008年			
2/2 (8人)	第二十三回	ウィリアム・シェイクスピア	『夏の夜の夢』 妖精パックの使った惚れ薬が、森を彷徨う恋人たちや芝居の稽古をする職人たちを巻き込んで、思いもよらない騒動を引き起こす。ハチャメチャな混乱から幸福感に包まれる大団円まで、まさに夢を見ているかのよう。シェイクスピアの魅力が詰まった大傑作。
3/22 (3人)	第二十四回	三好十郎	『好日』 主人公は貧しい暮らしを送る劇作家「三好」。自らとその周囲の人々の生活を生々しく、そして滑稽に描いた三好戯曲の一つの完成形とも言える作品ですが、発表されたのは作者の死後のことでした。『浮標』『胎内』『炎の人ゴッホ』などで知られる三好十郎の“私戯曲”の傑作。
3/30 (8人)	お花見		
6/21 (11人)	第二十五回	ゴーゴリ	『査察官』 ベテルブルグから査察官がやってくる！慌てふためく田舎の名士たちと、そこにたまたま現れた大法螺吹き。面白可笑しい喜劇を書き上げたつもりが、意図せぬ痛烈な官僚風刺に論争が巻き起こり、ゴーゴリは国外に逃げ出したとか。『査察官』という名でも知られる代表作。
8/13～ 8/14 (5人)	特別企画『ワークショップ：メソードによる俳優の心身のメンテナンス2』		講師：平井愛子氏（京都造形芸術大学准教授・演技トレーナー）
8/23 (6人)	第二十六回	ハロルド・ピンター	『帰郷』 北部ロンドンの古い家。アメリカで大学教授となった息子が妻を連れて実家へ帰省する。家庭を静かに不気味に侵蝕する狂気。この戯曲は、読み手に「信じる」とはたして何なのかを問いかける。
11/27 (7人)	第二十七回	ピーター・シェファール	『エクウス』 「何をしたんだい、その少年は…」精神科医の元に連れて来られたのは、六頭の馬の目をつぶした少年だった。何が正常で、何が異常なのか。病んでいるのは少年か、それとも社会なのか。『アマデウス』で有名なシェファールの代表作。
2009年			
1/29 (5人)	第二十八回	ウィリアム・シェイクスピア	『ジュリアス・シーザー』 ローマ帝国に君臨する皇帝シーザーの盛衰と、権謀術数うごめく政治家たちの人間ドラマ。『半沢直樹』を400年先取り。「ブルータス、お前もか！」の台詞はあまりにも有名。
3/30 (8人)	お花見		
4/28 (6人)	第二十九回	福田恒在	『キティ台風』 シェイクスピアの翻訳で知られる福田恒在は、また優れた劇作家でもありました。チェーホフ『桜の園』を下敷きに、資産家の邸宅に集まった人々と、台風に煽られるようにして晒されていく彼らの秘密を描いた四幕の喜劇。
10/14 (6人)	第三十回	ジョン・オズボーン	『怒りを込めてふりかえれ』 歴史上、労働者階級が初めて主役に躍り出た記念碑的戯曲。劇中で描かれる「怒れる若者たち」の姿は社会現象にまで発展した。実は『本読み会』誕生の契機となった名作でもあります。
12/17 (5人)	『忘本会！2009』		
2010年			
？ (？人)	お花見		
8/23 (8人)	第三十一回	つかこうへい	『熱海殺人事件ザ・ロンゲスト・スプリング』 時代を映し、いくつものバージョンが生み出されてきた『熱海殺人事件』。その決定版と銘打たれた作品です。殺意とは何か。愛とは何か。その真実を描くには、ロジックは邪魔になる。「動機なんか豚に食われる！」
？ (？人)	『忘本会！2010』		
2011年			
2/20 (6人)	第三十二回	フェデリコ・ガルシア・ロルカ	『血の婚礼』 スペイン・アンダルシア地方で執り行われる結婚式。新郎と新婦、そしてかつての恋人。駆け落ちの末に男と女が遂げる非業の死は、ロルカの言葉によって詩へ昇華する。
3/26～ 4/1	特別企画英国観劇旅行		<ul style="list-style-type: none"> ・『リア王』@スワン劇場（ストラットフォード・アポン・エイヴォン） ・『子供の時間』@コメディ劇場 ・『エドワード・フォックス』@リバーサイド・スタジオ ・『オペラ座の怪人』@ハー・マジェスティーズ劇場 ・『埋められた子供』@デューク・オブ・ヨーク劇場
5/8～5/9	特別上演企画	ハロルド・ピンター	『ダムウェイター』 地下室で仕事の合図を待つ謎めいた男二人に、姿の見えない階上の何者かから入る料理のオーダー。この芝居の主役は、もしかしたらダム・ウェイター（料理用エレベーター／黙ったままのウェイター）なのかも知れません。底知れぬ恐怖を感じさせる傑作。

松山も参加できず、参加者がなんと男性ばかり3名！本当に人が集まらない会でした。。しかし、この回、これまででも5本の指に入るのではという程、楽しめた回でした。「戯曲さえ良いものを選べば、絶対に楽しむことができる。」この回を経験したおかげで、人が集まらないのが苦にならなくなりました。まあ、それともうかと思えますが。。

二度目のメソードワークショップ。こちらも非常に楽しめました。

この回から第30回まで、松山がイギリス留学に行っていて不在でした。イギリス演劇シリーズと銘打って、いくつか読んでいます（福田恒在が挟まっていますが…）。

イギリスの松山と、電話が何かで連絡を取りながら開催したのを覚えています。

確かこのあたりで松山が帰国しました。なんとピンチを乗り越えましたが、この頃は人もなかなか集まらず、この後何年か、活動の少ない時期が続きます。

今はもう閉店してしまった御茶ノ水のパブレストラン「アミ」で開催。酒を飲みながらの本読みでした。つかこうへいのセリフと酒は相性がいい。かなり盛り上がりました。2010年はこの一回しか開催していません。

主宰二人でイギリスに行き、芝居を観て回りました。震災の直後だったので、日本から避難する外国人で飛行機はいっぱいでした。RSCの『リア王』の感動や『埋められた子供』での現地の方との出会いは忘れられません。演劇とはいかなる行為なのか、いろいろ考えさせられた旅になりました。

こちらは松山と彼の教え子の二人芝居。大野は少し演出の手伝いをしたという感じでした。

2012年				
1/15 (9人)	第三十三回	ウィリアム・シェイクスピア	『マクベス』	「きれいはきたない、きたないはきれい」。3人の魔女から王になるという予言を受けたマクベスは、妻と共に血塗られた道を歩み出す。今も上演の絶えない、劇詩人シェイクスピア四大悲劇の一作。
2/11	『本読み会』ホームページ誕生			
3/29～ 4/1	特別上演企画	フェルナンド・アラバル	『建築家とアッシリアの皇帝』	アッシリアの皇帝を名乗る一人の男と、彼に建築家に任命されたもう一人の男。とある島で繰り広げられる二人のごっこ遊びは、孤独と愛の行為でもあった。粗野で下品で、切なく哀しい物語。
3/30 (27人)	第三十四回	フェルナンド・アラバル	『戦場のピクニック』	舞台は戦場。鉄条網が張り巡らされ、爆撃音が鳴り響く中、一人の兵士が腹這いになって現れる。静寂。兵士は起き上がり、糸玉と編み針でセーターを編み出す。それがアラバル不条理劇にぴったり空いた地獄の入り口。
5/20 (15人)	第三十五回	清水邦夫	『狂人なおもて住生をとぐ一昔、僕達は愛したー』	娯楽に集う人々が始めた家族ゲーム。しかしいつしかそのゲームは狂気を帯びた家族の姿を浮かび上がらせて……。人々の狂気と幻想を可視化する、清水邦夫の傑作戯曲。
7/15 (13人)	第三十六回	ベルトルト・プレヒト	『ゼチュアンの善人』	プレヒトが中国の四川（ゼチュアン）を舞台に描く大人の寓話。ひとりの人間の中には、善人と悪人が同居しており、互いが互いを補充し合うように生きるを得ない人間の業。
9/16 (11人)	第三十七回	ウィリアム・サラヤン	『わが心高原に』	小説でもその名を知られるサラヤンの処女戯曲にして代表作。貧しい暮らしをしている詩人とその息子、彼らのもとに現れたシェイクスピア俳優を名乗る老人の交流を描いた、美しく、詩に溢れた物語。演劇史に燦然と輝く傑作です。
11/25 (13人)	第三十八回	泉鏡花	『夜叉ヶ池』	夜叉ヶ池を舞台に、人間と物の怪の対立は、次第に人間と人間の対立へと忍び寄る。戯曲を読むものは耽美な言葉に酔いしれ、舞台を観るものは甘美な装束に陶酔する。
2013年				
1/19 (7人)	第三十九回	A・P・チェーホフ	『熊』『結婚申しこみ』	四大喜劇ばかりがチェーホフじゃない！恋と喧嘩で作られているような滑稽で愛らしい人間の姿を、バカバカしいドタバタの中に閉じ込めた傑作の数々。チェーホフの天才を結晶化したような短編戯曲です。
3/10 (8人)	第四十回	サム・シェパード	『埋められた子供』	アメリカ中西部を舞台にした家族劇。狂気が正気か、生きているのか死んでいるのか、その狭間から悪夢が沸き出す。シェパードのピューリッツァ賞受賞作。
4/28 (7人)	第四十一回	ヨハン・アウグスト・ストリンダベリ	『幽霊ソナタ』	余りの気難しさに40日間に6人の召使いが逃げ出したという孤独な生活の中、皮膚病のため文字通り手から血を流しながら書かれたという作品。疑心暗鬼と理想がきらめくストリンダベリの世界に、あなたも逃げ出したいくなるかもしれません。
6/30 (8人)	第四十二回	ソートン・ワイルダー	『わが町』	世界一有名なト書き「このお芝居の題名は、『わが町』」。何もない舞台に人生のすべてを描き出し、演劇の有り様に革命を巻き起こしたワイルダー。
9/15 (5人)	第四十三回	エウリピデス	『メディア』	父を裏切り弟を殺し、全てを捨てて愛する男に尽くしてきた王女メディア。しかし最愛の夫に捨てられた時、彼女の愛は恐ろしいまでの怒りと憎しみに変わる。自分の生き方を決断していく人間の意志の力は、今も昔も、劇的です。
11/24 (16人)	第四十四回	唐十郎	『少女仮面』	宝塚歌劇団のスター女優に憧れる少女が、「肉体」という妙な名の喫茶店を訪れることから始まる奇想天外な物語。岸田國士戯曲賞を受賞した唐十郎の代表作。
2014年				
1/26 (12人)	第四十五回	ウィリアム・シェイクスピア	『お気に召すまま』	「恋とは溜め息と涙で、忠実な心と献身で、気まぐれな空想でできてるもんだ」。シェイクスピア作品の中でも群を抜いて生き生きと息づく登場人物たち。滑稽な、けれども真摯で美しい彼らの恋の花が、アーデンの森に咲き乱れます。
3/16 (8人)	第四十六回	ユージン・オニール	『すべて神の子には翼がある』	白人のエラと黒人のジム。少年時代から17年に渡る関係の中で、人種の違いは刻一刻と二人に影を落とす。オニールの筆は人間同士のドラマを越え、神と人間関係をえぐり出す。
5/25 (9人)	第四十七回	ノエル・カワード	『陽気な幽霊』	本国イギリスでは演出家・喜劇作家・喜劇俳優としてその名を歴史に残すノエル・カワード。第一次世界大戦のまっただ中、彼が書いたのはインチキ霊媒師と幽霊が巻き起こすドタバタコメディでした。演劇は芸術じゃない、芸能だ。そう思わせてくれる作品。
6/29 (9人)	第四十八回	岡本綺堂	『修善寺物語』	これぞ新歌舞伎の金字塔。伊豆の修善寺を舞台に、面作り師夜叉玉の執念が肉親の情をも凌駕する。まさに芸術原理主義！
9/7 (10人)	第四十九回	サミュエル・ベケット	『ゴドーを待ちながら』	ゴドーを待ち続ける二人の男と、一本の木。繰り返される無意味な会話を笑ううちに、意味の世界を待ち続けているのは彼らだけではないということに気づきます。世界一有名な「不条理演劇」。

『本読み会』のホームページが誕生しました。予想以上に反響があり、毎回新しい出会いがある一方で、常連参加者もどんどん増えてきて、参加者集めに苦労するということがなくなりました。戯曲読みたい人が結構いたということ以上に、インターネットの力に心底驚いた次第です。『本読み会』第二期のスタートです。

主宰二人出演の二人芝居です。演出など拙いものでしたが、とても高い評価をいただきました。ハプニングに見舞われた初日が特に高評価だったのが印象深いです。

アラバル上演企画と連動し、上演劇場で開催しました。参加者が一番多かった回です。

素晴らしい作品です。感動のあまり、文庫本に、「これが演劇だ」と書き込んでしまいました（笑）。

女性の参加者がとても多い回でした。作家によって参加者の数も様子が変わります。着物を着て来てくださった方もいました。

この年は「お正月だよ！チェーホフ祭り」をやってますね。

ちなみにこの年、大野は心理士として仕事を始めています。この頃はしっかり年6回開催していますね。演劇から遠ざからないように頑張っていたのかもしれませんが。振り返ってみると、作品の選び方も、少しずつあまり知らない作家に手を出し始めた印象です。ようやくちゃんとした会になってきた感じがします笑。

本読みの会で、こういった不条理作品を読むのはかなり勇気が要りました。10年目でようやく勇気を出して選んで読んでみたところ、無事楽しめました。ホッとすると同時に、感慨深いものもありました。

11/29 (13人)	特別企画『本読み会』十周年&第五十回開催記念『本読み会』だよ！全員集合	いろいろ	いろいろ	
11/29 (9人)	『忘本会！2014』			
2015年				
1/10 (14人)	第五十一回	ウィリアム・シェイクスピア	『冬物語』	ご想像ください、心優しい観客の皆様、いま私のあります場所は美しいボヘミアですーシチリア王の嫉妬によって引き起こされる悲劇と、16年の時を経て結ばれる和解。様々な嘆きと愛を、ごった煮と言っていいほどの喜劇的趣向で彩る、シェイクスピア最晩年のロマンス劇の傑作。
3/15 (9人)	第五十二回	ジャン・ラシーヌ	『フェードル』	自らの罪悪を見据えながら、義理の息子への禁断の恋に身を焦がすアテネの女王フェードル。抑えのきかない情念は、果たして人間の自由意志か、それとも神の呪いなのか。情念に突き動かされて生きる人間の姿を描いた、大劇作家ラシーヌの傑作。
4/25 (9人)	第五十三回	真山青果	『御浜御殿綱豊卿』	間違いなく日本一有名な復讐譚、赤穂浪士四十七人による討ち入りを、等身大の心理劇として描ききった連作「元禄忠臣蔵」。その中でも、とりわけ名作の誉れ高いのがこの作品。硬く、それでもなお生き生きとたぎるような台詞の中に、義理を踏み、正義を尽くさんと苦悩する男たちの生き様が垣間見える。
6/13 (15人)	『読んで楽しい！現代戯曲』① 第五十四回	アーノルド・ウェスカ	『ぼくはエルサレムのことを話しているのだ』	理想の生活を求めて田舎暮らしを始めた若い夫婦が、また都会へと戻ることになる。その過程に込められたのは、「本当に人間らしく生きるとはどういうことだろうか」というウェスカのもたえ苦しむような問いだった。第二次大戦後の時代の移り変わりの中を生きる架空の一家族の歴史を描いた三部作、その締めくくりとなる一作。
8/23 (13人)	『読んで楽しい！現代戯曲』② 第五十五回	三島由紀夫	『朱雀家の滅亡』	ある一家の崩壊の過程に滅びゆく大日本帝国の姿を重ね、日本を敗戦へと導いた狂気の美しさとおぞましさを描いた、三島戯曲を代表する傑作。人を導く理念や思想、信念も、結晶化すれば狂気と呼ぶに相応しい。
10/3 (10人)	『読んで楽しい！現代戯曲』③ 第五十六回	ウジェーヌ・イヨネスコ	『犀』	突如として街中に現れ、徐々にその数を増やしていく犀。そして犀を恐れながらも、徐々に自ら犀になることを選んでいく人間たち。論理とリアリズムを否定したはずの戯曲の中に、不思議と、リアルな何かが感じられる。イヨネスコ中期の傑作。
12/26 (13人)	『読んで楽しい！現代戯曲』④ 第五十七回	ハロルド・ピンター	『バースデイ・パーティー』	とある下宿屋で生活する老夫婦と一人の下宿人。そこに二人の来訪者が現れ、下宿人のバースデイ・パーティーを開く。何が語られているのか、何が行われているのか、理解可能なようでいて、決して理解できることはない。得体の知れない不気味さを持った、ハロルド・ピンターの初期の傑作。
12/26 (12人)	『忘本会！2015』			
2016年				
2/26 (10人)	上演企画同時開催「戯曲に親しむ！ワークショップ」			
2/27 (12人)	『読んで楽しい！現代戯曲』⑤ 上演企画同時開催第五十八回	テネシー・ウィリアムズ	『欲望という名の電車』	安ピアノの音が絶えず聞こえるニューオーリンズの町。貧しいが、幸せな生活を送る夫婦のもとへ、故郷である南部の大農園を離れることになった妻の姉が身を寄せてきた。一人の女性、そして一つの時代が崩れ去っていく様を、透き通ったリアリズムで描き出した、近代演劇史上不朽の名作。
2/28 (13人)	『読んで楽しい！現代戯曲』⑥ 上演企画同時開催第五十九回	三好十郎	『冒した者』	空襲で崩れかけた、崖の上に立つ屋敷。そこで共同生活を営む人々のもとに、一人の青年が訪れる。戦後、戦争責任を自ら振り返る中で、数々の傑作を生み出した三好十郎が、「これは『現代』の作品だ」「観る者が現代人ならば、悟ってくれるだろう」と語った、特に異彩を放つ名作の一つ。
2/26～28	『読んで楽しい！現代戯曲』⑦ 特別上演企画	エドワード・オールビー	『動物園物語』	男性2人芝居。舞台装置は公園のベンチのみ。1時間ほどの上演時間のうち半分は「ジェリーと犬の物語」と題される長い独白です。人とモノ、人とイヌ、人とヒト。孤独の宿命を背負う人間は、いかにして関係性=愛を結ぶべきなのか。
5/21 (14人)	特別企画シェイクスピア没後400年記念イベント『読んで観て楽しむ！初心者のためのハムレット入門』第六十回	ウィリアム・シェイクスピア	『ハムレット』	「生きるべきか、死ぬべきか、それが問題だ」戯曲を読んだことがなくても、演劇を観たことがなくても、シェイクスピアの名前と、このセリフだけは知っている。復讐という運命に絡めとられたデンマーク王子は、いかに生き、いかに死んでいったか。劇聖と謳われた作家の、代表作にして最大の傑作とも言うべき作品。

活動10周年、第50回を記念したイベントです。実は会の発足当時、「初めてすぐにやめちゃうとダサいから、何としても10年くらいは続けよう」と話していました笑。10年経って、次の目標が20年になりました。

イベントは、活動10年で扱った戯曲の中から主催2人が「愛の台詞」「怒りの台詞」「謎の台詞」「独白、傍白」「いい台詞」を選出。参加者にはタイトルも作家も明かさずに読んでもらい、名前を当ててもらおうというゲーム形式で行いました。面白かった！

このあたりから特別企画が増えていきます。『読んで楽しい！現代戯曲』のシリーズは、『動物園物語』上演企画に向けて始めたイベントだったのですが、2017年まで続けることになりました。かなり勉強になりました。

実は会発足時に、「一度扱った作家は二度は扱わない。ただしシェイクスピアは例外」と決めていました。10年経って、現代戯曲イベントもあったため、とうとう二週目を解禁することにしました。新しい作家に出会うことも楽しいですが、何度も読みたい作家というのがあります。

『動物園物語』上演劇場で、同時開催のイベントとして実施しました。小説や詩、絵本、エッセイなど、他ジャンルの文学を声に出して読んでみることで、戯曲に親しもうというワークショップです。大野が講師を務めました。

これらも同じく、『動物園物語』上演劇場で、同時開催のイベントとして実施しました。昼夜公演の合間に『本読み会』、結構ハードでしたが、楽しかったです。

『本読み会』発足のきっかけとなった学生時代の上演を、12年越しに再演しました。この上演は本当に楽しかった！

5/22 (8人)	特別企画シェイクスピア没後400年記念イベント『読んで観て楽しむ！初心者のためのハムレット入門』NTL『ハムレット』鑑賞会&懇談会			
7/23 (15人)	第六十一回	ジョン・フォード	『あわれ彼女は娼婦』	兄と妹の近親相姦というセンセーショナルなテーマに、濡れ場や復讐劇、果ては道化まで盛り込んだ、昼ドラのようなエンタテインメント作品。ただし、そこは歴史を生き残った古典の名作。強く大きいのしかかってくる息苦しい世界の中で、自由に息を吸おうとする戦いは、今読んでも強く訴える力を持つ。エリザベス朝後期に活躍したジョン・フォードの代表作。
8/13 (12人)	第六十二回	鶴屋南北	『東海道四谷怪談』	伊右衛門に裏切られて死んだお岩が、幽霊となって復讐を果たすー日本一有名と言っても過言ではない『四谷怪談』の主筋に、お岩の妹、その夫、横恋慕する薬屋の物語が複雑に絡んでいく、いわば「四谷怪談・外伝」。そこにリアルに描かれるのは、人間の業と情。本当にゾッとすべきは、幽霊ではなく人間なのかもしれない。
12/17 (7人)	特別企画『ビブリオバトル』&『忘年会！2016』			
2017年				
1/29 (9人)	第六十三回	アントン・チェーホフ	『ワーニャ伯父さん』	退任した都会暮らしの大学教授と、その美しい妻が田舎の領地に戻ってきた。そのことで巻き起こる騒動を描いた作品。失った何かを取り戻そうともがく人々の姿は、当人には悲劇も悲劇、けれどもどうしても滑稽さがつきまとう。人間の絶望と悲哀を、皮肉と愛情のこもった目で見つめた、チェーホフ戯曲の味わいが詰まった名作。
3/5 (14人)	第六十四回	ヘンリック・イブセン	『野がも』	真実と正義を追求する男グレーゲルスの行動は、囃らずも、大きな悲劇の呼び水となった。近代リアリズムの文体の陰に、信仰や理想、人間の自由意志といった深遠なテーマが見えてくる。イブセンの観察力と想像力を感じさせる傑作の一つ。
3/10 (6人)	第六十四、五回 こっそり本読み会	ヘンリック・イブセン	『棟梁ソルネス』	老いた棟梁の元に現れたのは、「わたしの王国」を要求する、若く美しい女だった。意図や想いの見えない言葉の連なりは、さながらミステリーやサスペンスのよう。独白のように語られる会話、狂気すら感じる論理展開の中に、イメージや観念が立ち昇っていく。リアリズムとシンボリズムの幸福な出会い、イブセンリアリズムの傑作。
6/3 (13人)	『読んで楽しい！現代戯曲』⑧ 第六十五回	ハイナー・ミュラー	『ハムレットマシーン』 『指令』	私はハムレットだった。浜辺に立ち、寄せては砕ける波に向かってああだこうだと喋っていた、ヨーロッパの廃墟を背にしてー。有名なこのフレーズから始まる、短く、しかし難解極まる一本のテキストが、演劇界に衝撃を与えた。名作『ハムレット』を解体し、様々なイメージとテキストを混ぜ合わせて構成された「戯曲」とも呼べない「戯曲」は、我々に、演劇とは、ドラマとは、戯曲とは、言葉とは、一体何なのかと問いかける。この無機質な言葉たちは、こんなに情緒豊かな台詞だったのか、そう驚かされる作品。
7/22 (10人)	『読んで楽しい！現代戯曲』⑨ 第六十六回	平田オリザ	『東京ノート』	小津安二郎『東京物語』をモチーフに、“物語の一步手前”という思いを込めて名付けられた平田オリザの代表作。“物語の一步手前”、しかしそれはただの日常の再現ではない。一見淡々と描かれた“静かな演劇”の奥深くには、緻密な設計の元、豊かで多彩な世界の姿が隠されている。現代日本演劇の一つの到達点。
8/21	『本読み会』リーディング・ライブ in 岸田國土を読む。夏2017	岸田國土	『命を弄ぶ男ふたり』 『沢氏の二人娘』 『紙風船』	「命を弄ぶ男ふたり」 月夜の線路脇。鉄道自殺を考える男二人がたまたま出くわした。二人はお互いの身の上話を始めるがー。岸田國土の本領発揮、くすくす、わはは、と気楽に楽しめる、傑作短編喜劇。 「紙風船」 たまの日曜、夫婦二人きりの水入らずの時間・・・のはずなのに、どうやってこの時間を過ごしたらいいのだろうか？可笑しくて、ちょっと切ない、夫婦の物語。文句なしの名作。
8/21	ライブハウスで読む！第六十七回『本読み会』	岸田國土	『沢氏の二人娘』	父親と二人の娘、そこに現れる一人の青年。家族なのに、いや家族だからこそ、皆どこかに秘密を抱え、何かを隠しながら生きている。皮肉な笑いを忍ばせながら、複雑な人間のあり様を描いた、傑作中編戯曲。
10/8 (12人)	『読んで楽しい！現代戯曲』⑩ 第六十八回	トム・ストッパード	『コースト・オブ・ユートピア (第二部〜離破〜)』	ロシア革命を生きた、ある男とその家族、そして友人たち。現実と理想の狭間で迷いさすらう彼らの姿に、普遍的な人間の在り方が浮かび上がる。硬派なテーマ、全三部全てを上演すると9時間を超えるそのボリュームが圧巻だが、紛れもない傑作。我々はいつになったら、向こう岸に着けるのだろう。

この頃からナショナル・シアター・ライブを逃さず観るようになりました。本当に良い企画だと思えます。

『読んで楽しい！現代戯曲』シリーズの途中でしたが、現代戯曲ばかり読んでいて古典が読みたくて仕方なくなり、休憩として二作品挟みました笑。

この回から松山が在外研修でイギリス滞在になり、しばらく不在になっています。

松山がいない間、自分の好きな作家を好きに選んで読むことにしました。そこで選んだのは、嫌いだっただいぶセン。なんとか魅力を見つけてやろうと作品をたくさん読んでみた結果、会で扱う作品の一つに絞れなくなり、急速『こっそり本読み会』として別日にもう一作読みました。結果、今ではイブセンラブの人間です。

この作家も選ぶのに勇気が要りました笑。読んでみると、やはり楽しめました。

南青山マンガラさんの企画「岸田國土を読む。夏」に参加しました。ただのリーディング上演ではなく、①お客さんに「戯曲」について説明し、②戯曲をスクリーンに投影しながら、③セリフだけでなくト書きも読む。というかなりこだわった上演をしました。結果、『本読み会』の上演がこれが正解なのかもしれないというくらい、良い形の上演になったと思います。「リーディング・ライブ」は、またやりたいですね。

12/3 (?人)	特別企画 NTL『ヘッダ・ガ ープレル』鑑賞会 &『忘本会！ 2017』	ヘンリック ク・イプセ ン	『ヘッダ・ガ ープレル』	気位高く、傲慢で、純粹。情熱的で、臆病な、美貌の女ヘッダ。矛盾を体現するような彼女の魅力は、世界中の女優を今なお魅了し続ける。性差や時代と言ったテーマを超え、神にはなり得ない人間の業を描いた近代戯曲の金字塔。
2018年				
1/27 (13人)	第六十九回	ウィリア ム・シェイ クスピア	『リチャード 3世』	畸形に生まれた主人公リチャードが、悪事の限りを尽くして権力の座を駆け上る。ドラマチックな展開とスピード感、世界を丸ごと叩き込んだような深さと広さ。シェイクスピアの魅力がたっぷり詰まった傑作。
3/10 (9人)	第七十回	田中千禾夫	『マリアの首 -幻に長崎を 想う曲-』	岸田流近代リアリズムを受け継ぎながらも、幻のように立ち上がる詩情あふれる言葉たちは、“幻に長崎を想う曲”の副題に相応しい作劇。長崎原爆を扱い、戦後の日本戯曲を代表する、美しく魅力のある戯曲。
5/6 (9人)	第七十一回	アーノ ルド・ウェ スター	『かれら自身 の黄金の都 市』	自分たちが作り上げる都市、“黄金の都市”を夢想する若き建築家アンドルー。第二次大戦を挟んだ60年にも渡る年月の中で、彼がいかにか理想に邁進し、妥協し、そして“敗北”していったか。芸術による社会変革を目指した「センター42」の活動で苦い“敗北”を味わったウェスターが、自身の思いを込めた傑作。
6/9 (12人)	第七十二回	ルイー ジ・ピラン デルロ	『作者を探 す六人の登 場人物』	ある劇団の稽古場に、“作者を探す六人の登場人物”が尋ねてくる。メタシアトリカルな設定や、虚構と真実の境目を探っていくような展開には、大作家ピランデルロの作家としての矜持が感じられる。現実を生きている我々は、本当に生きていると言えるのか。物語の力強さを感じさせる作品。
7/21 (14人)	第七十三回	アーサー ・ミラー	『セールスマ ンの死』	年輩いた平凡なサラリーマンの家庭が舞台。「こんなはずではなかった」と理想と現実の乖離に苦しむ家族の姿や、競争原理の経済社会の中をゆっくりと、しかし劇的に死に向かっていく人々の姿は、現代の我々を鏡に映したかのよう。これぞ現代劇、と言える傑作。
9/29 (13人)	第七十四回	菊池寛	『父帰る』 『藤十郎の 恋』『屋上 の狂人』 『入れ札』	20年もの間、行方不明だった父が家に帰ってきた。家族は父を受け入れられるのか（『父帰る』）。舞台のため、芸のためなら、役者は修羅になれる（『藤十郎の恋』）。本当に狂っているのは、屋上に登る狂人か、地に留まる我々なのか（『屋上の狂人』）。大切な何かを失うまいと、人は道を踏み外すことがある（『入れ札』）。緻密に重ね合わせた会話の先に、大きなドラマが動き出す。大衆の心を掴む、菊池寛の傑作短篇。
11/23 (10人)	第七十五回	フリード リヒ・デュ レンマッ ト	『物理学者た ち』	舞台はとある精神病院。三人の物理学者たちが、三人の看護師を絞殺した。カリカチュアライズされた登場人物たちによる、気味の悪い笑いに満ちた喜劇的やりとり。世界情勢と科学文明の抱える業に、怒りに満ちた警鐘を鳴らす、哲学的作品。
12/26 (12人?)	第七十六回	ニール・サ イモン	『ヨンカーズ 物語』	父の出稼ぎの間、祖母の家に預けられることになったとある兄弟と、ひと癖もふた癖もある家族たち。軽妙洒落なセリフのやり取りの中に、ほろ苦い人の生き様が垣間見える。読んでみると何故だか分からないけれど泣きそうになる、そんなふしぎな魅力に満ちた作品。ピューリッツァー賞受賞の傑作。
12/26 (10人?)	特別企画『忘本 会！2018』			

2018年は、「地味な作家を、地道に読む」を合言葉に読んできました。ここ数年特別企画などが多くなっていましたので、原点に立ち返ろうという動きです。

振り返ってみると、別にかなり大物の作家も扱っていて、地味な作家という点は疑問符が付きますが、地道に読む点については合格というところでしょう。

来年度2019年は、『本読み会』発足から15年です。何かしらイベントはやると思うので、またよろしく願いいたします！